〔新刊自己紹介〕

『ケーススタディ　日本語教育』

岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠弘巳共編者

川口義一

本書は、桜楓社の『ケーススタディ・シリーズ』の一冊で、日本語教育主専攻・副専攻の学生を中心に、広く言語学・日本語学・日本教育を目指すすべての人のために編集された、日本語教育の概説書である。取り上げた「ケース」は、メイン・ケースが二五項目、記述を一頁に収めた「ミニケース」が一一項目になっている。メイン・ケースには、「日本語の学習者」「表記」「読むこと」「授業分析」など、一般の概説書で扱うような項目を網羅し、ミニケースには「自律的学習」「中間言語」「コンピータと日本語」「ＯＰＩ」など、近年重要な概念になってきている項目を集めて情報の充実を図っている。なお、メイン・ケースが二五項目なのは、通年講義用教科書として使用するときに、一回の講義で一ケースを扱えば、ちょうど一年分の講義ができることを意図した結果である。

本書の、類似の概説書と異なる特徴は、次の三点である。まず、本文の記述がＱ＆Ａの形式になっていることである。Ｑには読者がしそうな質問を想定し、Ａで専門家がそれに答えるというスタイルになっている。次に、本文のあとに「今後の学習」として、読者に更なる学習を促す課題を一〇題前後設けたことである。これによって、本文で述べ切れなかった問題点を拾っていくことができる。〔ちなみに、この、Ｑ＆Ａ方式と「今後の学習」は、アメリカの言語学の教科書などがよく取るスタイルである。〕最後に、参考文献の内容について簡単な紹介がついていることがある。これによって、学習に必要な情報はどの文献に拠ればよいかが分かりやすくなっている。

では、筆者が担当したメイン・ケースをご紹介して、本書の構成の一端を窺えるようにしてきたい。筆者の執筆項目はメイン・ケース一、ミニ・ケース三であるが、メイン・ケースは「ケース7　コミュニカティブ・アプローチ」である。

まず、「本文」の部分には以下の四つの問いを設けた。

（問1）コミュニカティブ・アプローチの「コミュニカティブ（communicative）」というのは、どういう意味なのでしょうか。

（問2）コミュニカティブ・アプローチは、教授法としてどのような特徴がありますか。

（問3）コミュニカティブ・アプローチの具体的な教授技術は、どのようなものですか。

（問4）コミュニカティブ・アプローチによる日本語教材を紹介してください。

それぞれの問いはデスマス体であるが、答えに当たる解説部分はデアル体の文章になっている。以下に、（問2）の解説の一部を引用する。

⑤　教材のオーセンティシティ（authenticity）を追及する。

言語の機能と文脈との関係認識と異文化理解を高めるための、教材はできるだけ「生のもの（authentic materials）」に近い形で使う。たとえば、初級の漢字指導に新聞をそのままコピーしたものを使うとか、聴解教材を録音するときに、不自然に発話のスピードを落したり語調を変えたりしないとかいったことである。これに伴って、「生の」教材が理解できたという達成感を学習者に与えるため、「未習語彙の意味は文脈から類推する（inferece）」「必要な情報だけピックアップして理解する（scnning）」といった学習スキルを意識化して活用させるのも、コミュニカティブ・アプローチの特徴である。

次に、「今後の学習」の部分であるが、1～6の六つの課題を用意した。なお、読者の便宜を考え、この課題に取り組むために参考になりそうな資料は（　）内で紹介した。具体例として、課題2の前文を以下に引用する。

2　コミュニカティブ・アプローチとオーディオ・リンガル法との主要な相違を表にしてください〔参考文献5（第2章）、8（第6章Ⅰ）参照〕。

最後の「参考文献」の覧では、一二件の参考文献を挙げたが、解説に当たる部分の記述は次のとおりである。

コミュニカティブ・アプローチの理論と実際についての全体像は、文献5、8、9によくまとめられている。教科書作成上の問題点については、文献7が興味深い。日本語教育への応用実戦例の報告や分析は、文献10の當作、迫田・西村、加藤、中山・McNeil各論文と文献11、12である。このほかにも、最近

はコミュニカティブ・アプローチに関する論文・研究書・教材などが多く出ているので、注意を要する。

本書は、編集者が四名、この四名以外の分担執筆者が一八名もいる。執筆者の人数が多いためと、当時編集者が仙台から広島に至る地域の別々の都市に住んでいたために、相互の連絡がとりにくく、記述のスタイルが違っている箇所がいくつか出てしまったことは残念である。改定版が出るときに統一したいと思うので、暫時ご辛抱願いたい。

以上が筆者担当部分の紹介である。ちなみに、執筆者のうち、川口を含めて小宮千鶴子氏・韓美卿氏の三名が本誌同人である。それぞれ得意とする分野を手際よくまとめてあるので、この紹介文をお読みの方は、まずその部分から目を通されてはいかがであろうか。

A5判　二一九頁　一九九二年一二月　桜楓社　二八〇〇円